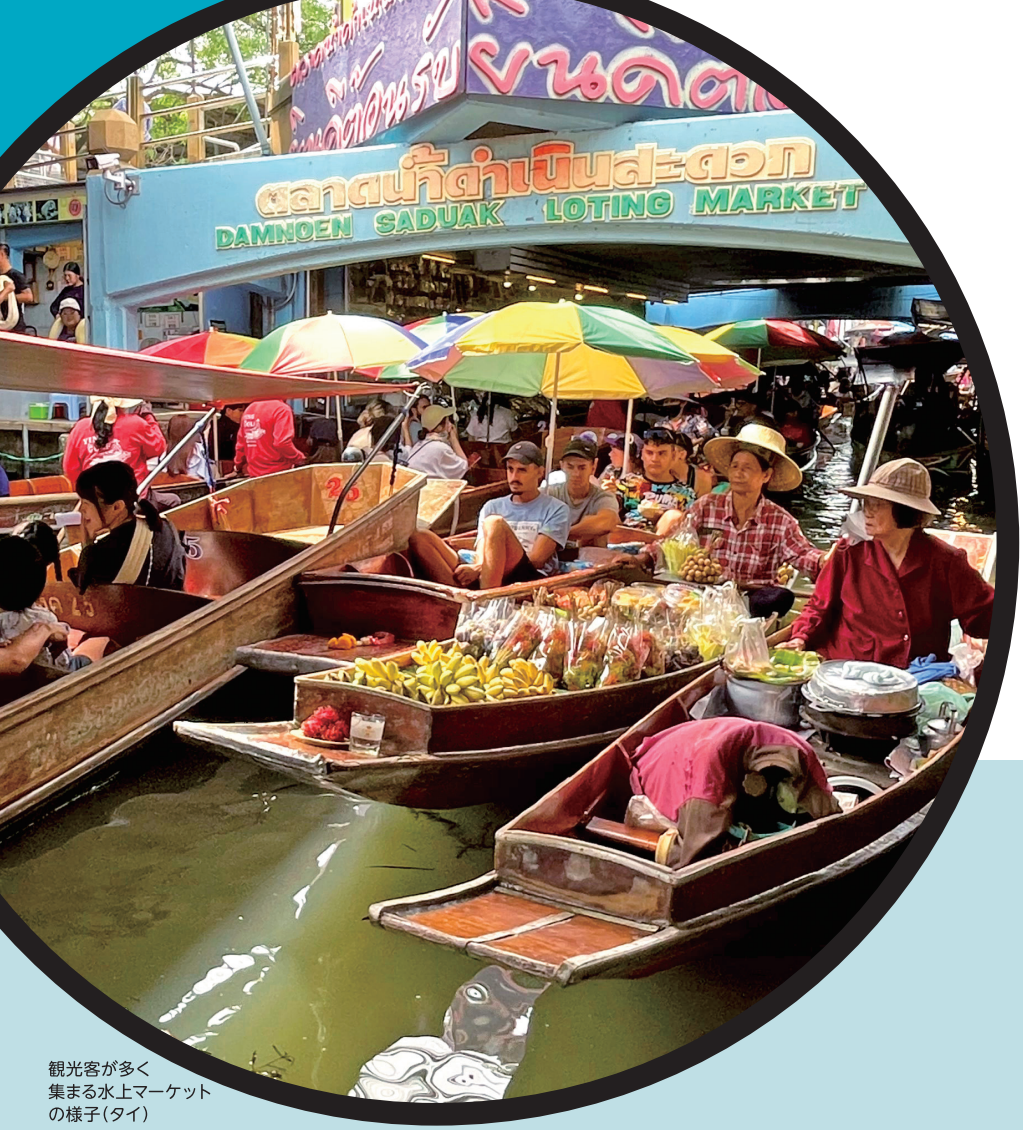


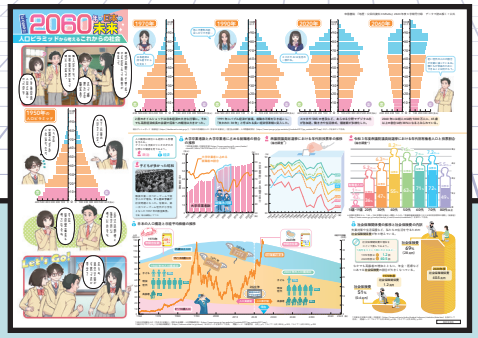
観光客が多く
集まる水上マーケット
の様子（タイ）

2024年度
3
学期号

日々の授業を
サポート！

地歴・公民科資料 教授用資料
ChiReKo（ちれこ）

付録
データで読み解く！公共
どうなる!? 2060年の日本の未来
－人口ピラミッドから考えるこれからの社会－



帝国書院

CONTENTS

2 帝国書院 取材班が行く！
タイ

4 教育情報ナビゲート
新宅 直人／山本 葉月／五十嵐 和也
小・中・高の先生方による座談会
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて
－接続と連携を意識した実践の取り組み－

12 授業研究 地理 森田 浩司
「クロスロード」を活用した授業実践例
－災害が起こったとき、どちらを選ぶか？－

16 授業研究 歴史 加島 悠太郎
原爆の歴史を語る
メタヒストリー学習の授業構成と実践事例案

20 授業研究 公民 中村 大輔
根拠を持って主張をする力をつけるために
－資料集『ライブ！公共 2024』を活用して－

24 徹底活用！ICT 根元 裕樹
歴史学習にもつながる**GIS**の紹介

28 地理でかがやく！お仕事大図鑑
「世界の台所探検家」
－世界の台所から見る 人々の暮らしと文化－
岡根谷 実里さん

30 史料読解～絵画にみる歴史～ 蓑島 栄紀
『夷酋列像』の虚実と背景
－イコトイの立ち絵を中心に－

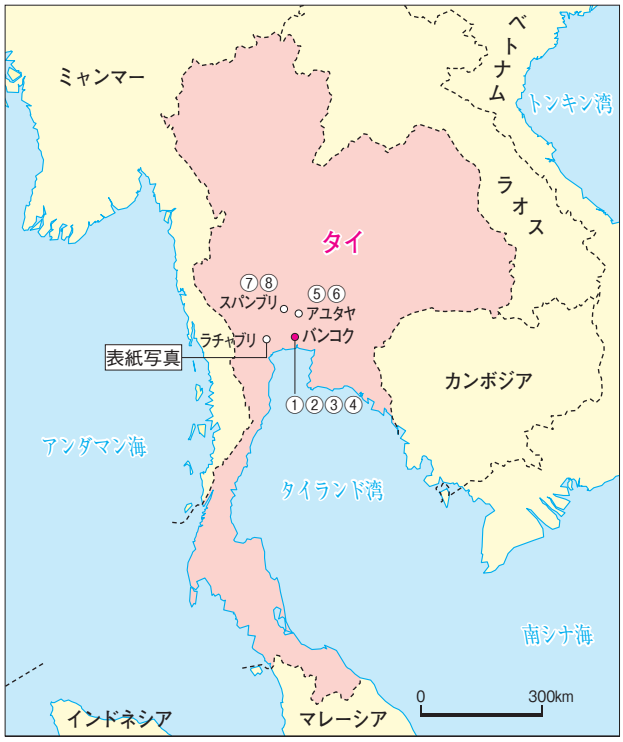
32 キャッチ！ 最新情報

34 地図のカフェテリア 今尾 恵介
地球の「溝」を探ってみよう

帝国書院 取材班が行く!

タイ

タイ王国 基本情報(2022年)
首都：バンコク　人口：約 6680 万　面積：約 51.3 万㎢　年平均気温：29.1℃(バンコク)



2024 年8月、取材班はタイを訪れた。タイと聞いてどんなイメージを持つだろうか。仏教国、王政、タイ米、そして「微笑(ほほえ)みの国」。実際に訪れることで見えてきた、タイ王国の現状を紹介していく。

タイ王国

タイには王政が敷かれており、国民は王室をとても敬っている。現在の国王はラーマ 10 世。国民の中で特に人気があるのは 5 世（在位 1868 ～ 1910 年）と 9 世（在位 1946 ～ 2016 年）とのこと。5 世は奴隷解放政策（1905 年）など近代化のための改革によって、9 世は農村開発や貧困削減の取り組みによって、それぞれ国民のために心血を注いだ事実と実績が人気につながっているようだ。バンコク周辺を移動していると、ビルの壁面や街なかのボードなど、各所に国王や皇后ら王家の方々の肖像が飾られているのが見られた（**写真②**）。

仏教と王室が身近にある生活・文化

タイでは自身の生まれた曜日を大切にする風習がある。各曜日に色が割り当てられており、例えば月曜日は黄色だ。現国王のラーマ 10 世が生まれたのが月曜日であるため、月曜日には公務員は全員必ず黄色いシャツを着て出勤することがルールになっている。また、一般市民の中にも、国王に敬意を表して黄色い衣服を着る人も多い。**写真①**は月曜日の早朝の様子だが、黄色いシャツを着た市民が見受けられる。

タイでは、生活の中でよいことをして「徳を積む」こ

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

とで救われると信じられている。その方法はいろいろあり、その一つに寺院への寄付がある。タイの寺院やその周辺では、20バーツ（日本円で約90円）ほどでお供え物セット（ろうそく、線香、蓮の花、金箔）を販売していることが多い（**写真③**）。これらを寺院の入り口や礼拝所で購入してから参拝するのが通例だ。

また、徳を積むための独特な文化として托鉢がある（**写真①**）。タイでは朝食を外で調達する習慣があるため、早朝の市場は朝食を購入しに来た人で大変混雑している。そこで僧侶用の食料などを購入して寄付し、お返しにお経をあげてもらう。

これらのほかにも、参道やスーパーマーケットなどで売っている僧侶の生活セットを寄贈したり（**写真④**）、寺院で仏像に袈裟（けさ）を寄贈したりもするそうだ（**写真⑤⑥**）。

タイの農業

バンコクから車で2時間ほど北上してアユタヤ県へ、そこからさらに西へ1時間ほど車を走らせると、スパンブリ県という国内生産第1位の稲作地帯にたどりつく。この地域では、農業センターから苗を購入してそれを栽培し、収穫している。ここスパンブリ県では三期作が主だが、県外では二期作が主となっている。

タイ国内で栽培されているのはほとんどが長粒種のタイ米である。以前はパラパラした硬めの米が人気であったが、ここ30年くらいの変化で、日本米のようにもちもちした軟らかい米を好むようになってきたという。タイ国内でも軟らかい品種が作られ始めており、ある会社では硬い品種500tに対し、軟らかい品種は5000tも売れたそうだ。

田植えの様子を見学していると、田んぼの反対側で腕組みして作業を見つめている男性がいた。しかし、一向に作業に加わる様子はない。田植え、農薬散布、収穫のすべてを専門業者が請け負い（**写真⑦**）、オーナーは監督するだけとのこと。この分業がタイの農業のやり方だそうである。

見学した田んぼでは、農業センターから購入した苗を田植機に装填（そうてん）し、田植えを行っていた（**写真⑧**）。稲を植える際、タイ中部のほとんどの地域では苗植えが10%、もみまきが90%だが、スパンブリ県に限定すると田植機による苗植えがほとんどになるとのこと。苗の育成、田植え、農薬散布、収穫までほとんどすべてが機械化されている様子を見ることができた。稲作の分野においては、かなり機械化が進んでいるといえるだろう。

写真：2024年8月撮影／帝国書院